大乗荘厳経論 (弘法品) の考察

舟 橋 尚 哉

品について考察してみようと思う。については考察したことがあるので、今回は第十二章の弘法については考察したことがあるので、今回は第十二章の弘法私はすでに第九章菩提品、第十章信解品、第十一章求法品(3)

るように、説法品ともいわれる。 弘法品は初めに dharmadeśanāyāṃ(法を説くにおける) とあ

さて弘法品(説法品)の第四偈は、Lévi イギでは次の如くな

っている。

āgamato adhigamato vibhutvato deśanāgrasatvānāṃ | mukhato rūpātsarvākāśāduccaraṇatā 'pi···||4||

らと、口からと、一切の色からと、虚空からも発声される」「最上の衆生に対する教説は、阿含からと、証得からと、威力か

が、「或は単に tathā などか」といっておられる。たしかに不完全である。宇井博士はこの偈はニシラブル欠けているるから、c―bは27マートラと24(または25)マートラとなってるの偈は Āryā 調であるため、a―bが30マートラであこの偈は Āryā 調であるため、a―bが30マートラであ

らこいう見引こう合文している。トなつら、り、Āryā 調の規定と合致する。そして第六韻脚は単綴であまtathā を最後に入れれば、三マートラ増えて27マートラにな

mukhato rūpātsarvākāśāduccaraṇatā 'pi tathā||4||

UU-|--|--|--|-UU|U|-UU|-

となる。しかしこれでよいのであろうか。

Lévi の仏訳(p. 139 脚註4)並びに長尾博士の訂正によれば sarvākāśād を sarvata ākāśād に訂正されている。これ

mukhato rūpātsarvata ākāśāduccaraṇatā 'pi

U U — | — — | — U | — — | — — | U | U U — | —

れに従っている。 調の規定とも合致する。そして Bagchi 本 (p.76,1.25) もそとなり、27マートラで、第六韻脚は単綴であるという Āryā

sarvād ākāśāduccaraṇatā

とあり、またA本(71b, L. 6)にも、sarvād ākāśā(d)(u)ccaraṇato(tā?)

した方がよいと思う。すなわち、とあるところから、私は sarvād ākāśād uccaraṇatā と訂正とあるところから、私は sarvād ākāśād uccaraṇatā と訂正

mukhato rūpātsarvād ākāsād uccaraṇatā 'pi

(sarva は m.(n) sg. Ab. で名詞的変化 sarvāt が可能である)となる。このようにしても、Āryā調の規定とは合致するし、

Na 本(47a, 1. 6)も sarvādākāśā のように読める(Na 本にNa 本(47a, 1. 6)も sarvādākāśā のように読める(Na 本に

デーバーナーガリーの上からもsarvādākāśād と読める。

sarvākāśē

(Lévi 本)

(Lévi 仏訳、Nagao, Bagchi 推定)

2) sarvata ākāśē

(3)

sarvādākāśā (私の推定)

はないと思うが、ここにそれ以外の写本も用いて再検討して大谷探検本A、Bを用いて訂正されているので、あまり問題次に第七偈であるが、この偈はすでに武内教授によって、dā が誤まって脱落したものと考えればよいと思う。 私の推定の方が元の Lévi 本に類似しているし、単に

大乗荘厳経論(弘法品)

の考察

(舟橋)

adīnā madhurā sūktā pratītā viṣadā tathā

ままでは読めないので、Lévi は仏訳を出版するときに、チを補っている。しかしこれではチベット訳とも異なり、このとあるのみで、c−dは欠けている。しかし Lévi は脚註に

adīnā madhurā sūktā pratītā vāg jinātmaje | nirāmiṣā yathārhā ca pramitā viśadā tathā | 7 | ベット訳を参照して、

と訂正している。

adinā madhurā sūktā pratītā vāg jinātmaie| 武内教授は大谷探検本、A本B本などを参照して、

adīnā madhurā sūktā pratītā vāg jinātmaje) yathārhānāmiṣā caiva pramitā viṣadā tathā ||7||

合致している。 と訂正されている。これなら、Śloka 第一形式 pathya とも

ここで問題なのは、jinātmaje (sg. L) でよいか、jinātmaja (sg. V) の方がよいかということである。チベット訳 rgyal sras (影印北京版 80-5-6、デルゲ版 182a²) から見ると、jinātmaja (sg. V) のようにも見える。A本 (72b, 1.3) ātmajah B本 (77a, 1.8) ātmajo からは決定できない。しかし Na 本 (47b, 1.6) には jinātmaje とあることは注意すべきであろ (47b, 1.6) には jinātmaje とあることは注意すべきであろ

であろう。

(sg. V) のようにも見えるが、その偈文の直後の説明に、 更に安慧釈の偈文には、rgyal sras とあって、jinātmaja

薩である。諸菩薩たちの語とは八支と相応するという意である」(cs) 「その中、勝者とは仏世尊である。その子とは法界より生じた菩

その他の個所も武内教授の訂正でよいと思う。 と思われるので、Léviや武内教授の訂正でよいことになる。

tmaja (sg. V) とあるよりは、jinātmaje (sg. L) の方が

よい

とあって、「諸菩薩たちの語」とあることよりすれば、jinā

宇井博士 (p. 617) も、Bagchi (p. 77, 1.17) も同じくこれを 瞭な点を Na 本や Ns 本を用いることによって jinātmaje 採用されている。従って私は大谷探検本のA本、B本の不明 (sg. L) でよいという資料を一つ加えたにすぎない。 長尾博士 (Index xvi, 1. 21) もこれを採用しておられるし、

次に第五偈の長行には、梵天所問経が引用されている。 を顕わすこととの、四法を具足せる菩薩達は大法施を与える」(11) を明浄にすることと、③善人の業を為すことと、4)雑染と清浄と 「梵天所問経中に説かれた如く。⑴正法の受持と、⑵自己の智慧

この梵天所問経は羅什訳の思益梵天所問経 巻

「何等四。一者守護於法。二者自益智慧亦益他人。三者行善人 四者示人垢浄」(大正一五、三六a

竺法護訳の持心梵天所問経の、

恨之結」(大正一五、三c) 何等四。将護正法。 化己及彼使入智慧。修正士業。 示現塵労瞋

偈の長行にも引用され、また摂大乗論にも引用されている。(st) (st)) あると考えられる。梵天所問経は、荘厳経論求法品第七十六 との関係で詳しく論じられているので、ここでは省略する。 すでに袴谷憲昭氏が Vimuktisena の Abhisamayālaṃkāravṛtti の中に一致する経文が見出されるから、 次に第九偈以下に説かれている六十種の音声については、 最後に第十六偈、第十七偈の長行に引用されるところの、 asāre sāramatayo viparyāse ca susthitāḥ これらよりの引用で

kleśena ca susamklistā labhante bodhimuttamām

「不堅堅固解。 善住於顚倒。

為煩悩所悩。速得大菩提」(大正三一、六二〇c)

の偈頌は、宇井博士の指摘の如く『摂大乗論』の所知相分の(3) 偈頌と一致する。そして荘厳経論の漢訳 に は 「如大乗経偈

説」(大正三一、六二〇c)と説かれている。

しているように思われる。 実はこの偈頌は Dhammapada (法句経) 法句経の第十 の第十一偈と類似 偶には

Asāre sāramatino sāre cāsāradassino

te sāraŋ nādhigacchanti micchāsankappagocārā

「不実を実と謂い、 又実を不実と見る人は、 実を了解せずして、

邪思惟に住す」(荻原訳)

samyag- に訂正すべきであろう。 113, *l.* 18 でも samyag- とあるから、 となっている。 いるし、NA 本 (48a, 1.8) も、Ns 本 (66a, 1.4) も、 のA本 (73b, 1. 2) も、 袴谷氏の訂正のように、 その 第九偈の長行の Lévi 本、p. 80, 1.7 Corrado Pensa: Abhisamayālamkāravrtti p. B本(78a, l. 8) samyag- でよいと思う。 Ą やはり samyag- となって saṃpansaṃpan-大谷探検本 samyag-は は

2) 4) 本 mon's pa (影印北京版82-2-6) と一致しているか 本にも訂正はないが、宇井博士の訂正のように、susamklist saṃkliṣṭā は Lévi の仏訳、長尾博士の Index、それに 今後は他の章についても同じように考察を試みたいと思う。 点より見ても、 なっていて、 に訂正すべきであろう。 ベット 以上、第十二章の弘法品について、若干の考察を加えたに ņ 82, 1. 21) となっているし、 B本 (81b, 1.1) も susaṃkliṣṭā となっている。 Į, 第十七偈の長行の、 この中に 直 susaṃkliṣṭā rab 前 の ñon moṅs pa(影印北京版 も種 susaṃkliṣṭā のチベ 直前の引用偈では susaṃkliṣṭā (Lévi, Þ と訂正すべきであると思う。 の 問 !題があることがわかっ 大谷探検本のA本 (76a, 1. Lévi 本 ット Ö 82 | 2 | 8 | 8 5 rab Bagchi 25 また ح た ñon sa の

- 1 心として―」(大谷大学研究年報第三十二集) ;稿「大乗荘厳経論の研究──菩提品第一 偈~ 第三十 -七偈
- を中心として―」(仏教学セミナー第三十三号)拙稿「大乗荘厳経論の研究―菩提品第三十八偈 1 第 Ŧ. + 立
- 巻第二号) 拙稿「大乗荘厳経論(菩提品)の原典考」(印仏研 究第二十
- 第一号) 信信 解品) の原典考」 (印仏研究第三十
- Bを用いて―」(印仏研究第二十七巻第一号) 拙稿「大乗荘厳経論(求法品)の原典の考察 教学セミナー第二十七号) 拙稿「大乗荘厳経論の原典考―求法品を中心 求法品を中心 として一」(仏

3 2

- 大谷
- Lévi p. 77, l. 24 参照。

4

- 5 字井博士「大乗荘厳経論研究」六一 六 頁 註
- 6 No. 291 Mahāyānasūtrālankārah を Ns 本と呼ぶことにする。 こに感謝の意を表します。 National Archives, Nepal の目録 Bṛhatsūcīpatram 112 349 -
- 7 、竜谷大学論集第三五二号)昭31年、 武内紹晃教授「大谷探検隊招来の 『大乗荘厳経論』につ 八一一八三頁参 照。 -ح
- 8
- Lévi 本、p. 78, L. 19 参照。 Lévi 仏訳 p. 141 脚註参照。 影印北京版 301-4-8参照。
- 13121110 9 晃教授「瑜伽行唯識学の研究」七四頁参照に 上évi, 本、p. 75, l. 20 参照。 日本は、本、p. 75, l. 20 参照。 日本は、本、p. 75, l. 20 参照。 ·四六三頁参

内

駒沢大学仏教学部論集、第四号昭48年)一頁参照。袴谷憲昭氏「『大乗荘厳経論』散文箇所の著者問題 0 v 7

14

171615

- 駒沢大学仏教学部論集、 宇井博士「大乗荘厳経論研究」六一七頁参照。
- 宇井博士「大乗荘厳経論研究」六一七頁参照。 Dhammapada p. 2, l. 19 Shukla 本、171 p. 19, l. 照

大谷大学助教授